

地質標本館だより



No.53

夏休み特別展示・岡本ミネラルコレクション

恒例の夏休み特別展示が1998年7月31日～9月30日の2ヵ月間、標本館1階ホールで開催されました。テーマは「岡本ミネラルコレクション-日本の代表的鉱物とカタログ・データベースの公開-」でした。岡本コレクションは、九州帝国大学(現九州大学)の故・岡本要八郎博士(1876-1960)の収集した3,400点を超える鉱物標本で、福岡県長垂山・大分県尾平鉱山・宮崎県土呂久鉱山など九州の代表的鉱物産地のほか、日本国内はもとより、台湾・アメリカ・ヨーロッパなど世界各地からの標本から成っており、その網羅性は非常に高いものがあります。また、海外からの標本には多くの原産地標本が含まれており、岡本博士の標本収集方針の一端を垣間みることができます。さらに、本コレクションは、木下亀城著「原色鉱石図鑑」(1962)、木下亀城・湊秀雄著「続原色鉱石図鑑」(1963)、木下亀城・小川留太郎著「標準原色図鑑全集6 岩石鉱物」(1967)の3冊の図鑑に約220点にのぼる標本の写真が掲載されており、研究・教育上にも大きな貢献を果たしてきました。本コレクションは、1959年に岡本博士から地質調査所九州地域地質センタ



写真1 特別展示「岡本ミネラルコレクション」。



写真2 鉱物標本を食い入るように見る見学者。

(当時・福岡駐在員事務所)に寄贈され、1995年に標本館に移管され現在に至っています。

地質標本館では、その研究業務の一環として、所蔵標本の登録及びカタログ・データベース作成の作業を行っています。岡本コレクションについては、数年に及ぶX線粉末回折やX線マイクロアナライザーを用いた標本の再同定や、文献調査による産地・産状の検討を経てカタログを完成させ、1998年3月に「地質調査所標本資料報告第2号 地質標本館所蔵標本目録 岡本鉱物コレクション」(豊遙秋・春名 誠)を発行しました。また、カタログは、ファイルメーカー Proにより、パソコン上で検索できるデータベースにもなっています(地質ニュース no.532, p.45)。

今回の特別展示は、岡本コレクションについての上記の成果を一般に公開するために行われたもので、日本産鉱物・外国産鉱物・原産地標本・図鑑に掲載されている標本などに分類した代表的な実物標本、コレクションの概要を説明したパネル、及びカタログを展示しました(写真1, 2)。工業技術院統一公開日でもあった特別展の初日には、会場にパソコン2台を設置してデータベースも公開し、来館者に標本の検索を体験していただきました。

特別展示に用いた標本は、近い将来に常設展示とするよう計画を進めています。(春名 誠)

地質標本館のマスコットの名前決まる!

-ジオくんと決定-

1998年4月より地質標本館入口や工業技術院正



写真3 名前が決まった標本館のマスコット「ジオくん」.



写真4 記念品を手にする「ジオくん」の命名者の方々.

門に地質標本館の案内を表示する「恐竜」の看板(写真3)が設置されました。地質標本館のマスコットとでもいべきこの恐竜君に名前をつけてはということになり、7月1日から8月17日まで名前を募集しました。その結果、274件もの応募があり、恐竜君の作者である総務部の河村幸男氏らにより名前の選考が行われ、「ジオくん」と決定しました。ジオくんの名前をつけてくれた方々は、つくば市の寺島孝子さん、梓さん、光さん、土浦市の酒井静江さん、横浜市の竹重拓希さんです。名前の発表は恒例となっている地球何でも相談や化石クリーニングが行われた8月21日に行われました。当日は命名者の方々をお招きして、一般の入館者や当所の職員らの拍手の中、豊 遙秋館長より記念品(恐竜の

1999年3月号



写真5 命名式と同じ日に行われた「地球何でも相談」の様子。32件の相談がありました。



写真6 「化石クリーニング」(8/21)の様子。

歯のレプリカ、アンモナイト、紫水晶、方解石、テレビ石等々の標本)が送られました(写真4)。

地質標本館の体験型イベント

地質標本館では地球科学の楽しさを皆さんに知ってもらうことを目的にして、いくつかの体験型イベントを企画してきました。ひとつは例年夏休みの企画として定着した化石クリーニングです。今年(1998年)は8月21日に行われ、157名の方々の参加がありました(写真6)。化石クリーニングでは地質標本館OB尾上 亨博士と二人のアシスタント(尾上千江子・柳沢朝江さん)の指導により約30万年前の塩原植物化石のでき方を教授したのち、化石のとり出し(クリーニング)を行っています。尾上博士他の丁寧な指導のもと、参加者には上々の評判で、中にはすっかりとりこになった人もいました。

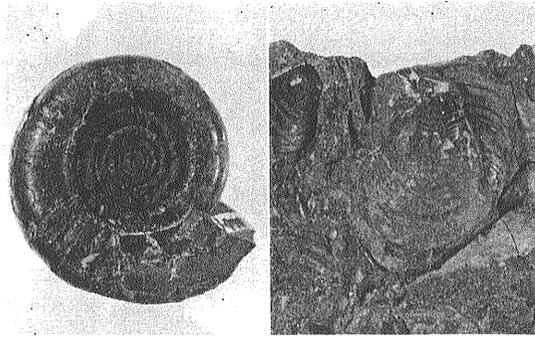


写真7 レプリカの原型となった化石。左 アンモナイト (GSJ F4880)、右 イノセラムス (GSJ F3568)。

また1998年11月14日は地質標本館の新企画「自分で作ろう化石のレプリカ」が開催されました。これは大型化石のレプリカを作製し、できあがったものをお土産として持ち帰ってもらい、一般の人々に地学の関心を持ってもらおうと企画されたものです。レプリカ作製は大型化石研究の重要な技術の一つで、地質標本館でも展示や標本研究・交換のためにレプリカ標本が作られています。通常のレプリカ作製はビニルシリコン等の印象剤で型どりを行い、石膏を型に流し込むという手順ですが、このイベントではあらかじめできあがった型に石膏を流し込むところだけをやってもらうことにしました。今回用いた型はアンモナイトと二枚貝(イノセラムス)です。型を取った化石(写真7)は地質標本館の登録標本で、第4展示室に展示されています。

作業の流れを紹介しましょう。適量の石膏と水とをプラスチック製の容器に入れて、割り箸でよくかき混ぜた後、型に流し込みます。そのままどと



写真8 「自分で作ろう化石のレプリカ」(11/14)の様子。

型の表面に気泡が発生するので、型に石膏を半分程度流し込んだ後、型全体を軽くとんとんと叩いて気泡を追い出します。またつまようじの先の太い部分を用いて型の底を軽くこするのも気泡を追い出すのに効果的です。石膏を全部流し込めば完了です。硬化するのに30分程度かかります。家に帰って水彩絵の具を用いて色つけするとより本物らしく見えます。このため化石の写真のカラーコピーを同封しました。当日は開館と同時に人がどっと押し寄せ、列ができるほどの賑わいを呈しました。イベントの参加者は74名で、64個のアンモナイトと45個のイノセラムスが作製されました(写真8)。アンケートによると今後作ってみたい化石のレプリカは恐竜の骨や歯、三葉虫、カブトガニが多く、やはり恐竜に対する関心が高いようです。今回行われた化石レプリカ作製のイベントは大変評判が良く、今後も続けていければと考えております。

(坂野靖行・利光誠一・大田義浩)